

親族から王へ

山内 昶

要 旨

いずれまとめる予定の国家論の序章である。まず、kin と king は政治・社会的に矛盾概念であるのに、なぜ同根なのかの問いを立てた。両語の語源は印欧基語の gen- であり、従って generosity とも同源である。そこから《相互性》に基づく「気前のよい贈与交換」こそが人類社会の《黄金律》に他ならないことを明らかにした。

ついで、この互酬性が狩猟採集と農耕社会の生産構造の差異によってどのように異なって現象するかを、経済人類学的に解明した。相互性は分配経済を再分配経済に変換して階層分化を促進させる起動装置であるが、同時にまた王制という支配／被支配の相剋社会の出現を阻止する制動装置でもあったのである。

キーワード：相互性・親族・王

はじめに

「親切 (kindness) は親族 (kindred) につれ」という名言を残したのは、タイラーだった。「共通の語根から派生したこの二つの言葉は、社会生活の主要原理の一つを、もっとも巧みな言い回しで表現」(サーリンズ, 1984, p. 236) していたからである。この原理とは人類社会の《重力の法則》(レヴィ＝ストロース) とも、《黄金律》(パール)、《普遍的公理》(マランダ) ともいわれる reciprocity (相互性、互酬性) に他ならない。親族制 (kinship) 社会では、マリノフスキーが《純粋な贈与》と呼んだもの、すなわち「惜しみなく与え、受け取る規則」という《全体的給付組織》が社会構成の基盤をなしていたことは、モーアの『贈与論』以降すでに定説となっている。いやこれは何も本源社会——すべての人類がそこから出発し、そこを通過してきたという意味で、

primitive society をこう訳す、従って primitive も本源人と表記する——だけとは限らない。現代の利益社会でも市場外の私的領域では、親子、夫婦、恋人そのほか愛によって結ばれた親縁関係では依然として相互性が機能しているのだから。

ところが奇妙にも王 (king) もまた親族 (kin) 及びその一連の語群 (akin, Kind, kinsfolks, kinsman, kith, etc.) と語源を等しくしていた。これは矛盾ではないだろうか。というのも、親族制社会とはいってもなく相互性に基づく相対的に平等な無階級社会だが、王国 (kingdom) とは支配／被支配の相剋性に基づく階級社会に他ならない。古来から暴虐無道の王の代名詞となった、中国の桀や紂、日本の武烈、古代ローマのカリグラなどを思い出すだけでよい。武烈は妊婦の腹を裂いたり、生爪を剥いで山芋を掘らせたり、女を裸にしてウマとつるびさせたと喜んだりしていた。人民を恐怖で震えあがらせていたこんな king が、にも拘らずなぜ kin と同根だったのだろうか。

本稿は、いずれまとめる予定の国家論の序章として、相互性それ自体の中にすでにして相剋性が胚胎されていることを明らかにし、なぜ相互性の胎内に孕まれていた王子が呱呱の声をあげて王に生長してゆくのか、その原因の考察を目的とする。とはいえ人類は何百万年もの間王なしで暮らしてきたのであり、多くの場合孕まれた王子は相互性そのものによって流産させられ、強制的に墮胎させられてきた。ラミダス猿人を起点にとると、初期国家の出現は人類史の千分の1以降のことであり、AD1500年の時点においても国家の占める面積は地表の20%以下にすぎなかった。国家の起源の探求は同時になぜかくも王子が難産だったかの追求でもあるが、ここでは紙幅と時間の制約から、ごく基本的な導入部の略述に止めざるをえないことをお断りしておく。

1 King, Generosity, Hospitality

そこでまず、王の語源から始めよう。バンヴェニスト (1987, II, p. 80) によると、ゲルマン語族の王は、印欧基語の gen- に由来していた。

英語で king、ドイツ語で König などと表現される王の呼称は、*kun-ing-az にまで遡れる。これは、語基 kun に -ing のついた派生形である (cf. ゴート語の kuni 《民族、家族》は、それ自体語根 *gen- 生まれるから派生した名詞形態で、ラテン語の gens [氏族、子孫] やギリシア語の génos [子孫、血族] と同一の語群に属する)。《王》は《リネッジの者》として、すなわちそれを代表し、その長になるべく生まれた者として名づけられる。実際、彼の誕生が明記される時には、いつでも高貴であることが示される。たとえばタキトゥスはゲルマン人について、Reges ex nobilitate... sumunt [王を立てるのに……その貴種をもってする] と述べている (『ゲルマニア』VII、1)。そこでは《王》は彼の部族の代表とみなされて

いる。

語尾の -ing は所属、由来、家系、血統を示す接尾辞だが、この語根 gen- ないしその変形 gne-、gna- の派生語は現代の西洋でも驚くほど広汎な語クラスターを形成——英語でいうと遺伝子 (gene) から発電機 (generator) まで50語以上——しているが、ギロー (1982, p. 104) によると、その印欧原義は次の五つだった。

- (1) 生まれる、子を作る (F. engendrer < L. genere ないし gignere = 父を子に結びつける)
- (2) ひざ (E. knee < L. genu = 脚を腿に結びつける)
- (3) あご (E. chin < L. genae = 二つの部分を結びつける)
- (4) 結ぶ (E. knot < L. nōdarē = 二つの部分を結びつける)
- (5) 知る (E. know < Gk. gignoskō ないし L. gnāscere = 未知のものを既知のものに結びつける)

英仏語やギリシア・ラテン語は筆者が略記号で補注したものだが、こうした原義からすると、gen- の共通の語源核は《結びつけること》、つまりばらばらな分節を連節し関係づけて一つの結合体を造ることにあったらしい。なおゲルマン語族の g から k への変換はいうまでもなくグリムの法則によっている。

ところで同じ gen- 語群の中に generosity という単語があった。人類学では普通「気前のよさ」と訳すが、この言葉こそ本源社会の鍵=概念に他ならない。というのもこの概念は相互性に基づく贈与交換を通じて、個々の個人や集団を結びつけ、遠心的な分節社会を求心的に連節し凝集する本源社会の根本的な編成原理だったからである。この実例については民族誌を繙けば銀河の星の数ほどもでてくるが、ここでは17世紀頃最高首長を擁してザンビアで強大な勢力を誇っていたベンバ王国に関するリチャーズ (1961, p. 135) の一節を引用するに止めておこう。「調理された食物の分配が、権力者の属性でもあれば、それゆえ威信にもほかならない。食物をうけとった人は、逆に与え手に、尊敬、サービス、reciprocal hospitality をお返ししなければならない立場におかれる。」

Paramountchiefdom でも気前のよい相互性が機動していたわけだが、さらに hospitality (親切なもてなし) という重要な用語がでてきたので、これについても一言しておかねばならない。同じくバンヴェニスト (*op. cit.*, I, p. 80) によると、その印欧基語は ghosti- であって、「相互に歓待の義務を負う者」を意味していた。そこから一連の派生語、即ちラテン語の hospes (主人、客人) や英語の host, hostess, hospice、

hospital、hotel、気音 h の脱落形 guest ——これはゴート語の gasts や古スラヴ語の gosti と同じである——等々の語群が由来してきたのである。さらに hospes の古形には hostis 形があり、これは「他人者、異人、敵」を意味した。英語の hostile 系の言葉はこの流れを掬んでいるが、客人歓待と敵とはどういう関係にあるのだろうか。

この hostis はローマ領土外に居住する完全な他所者、異人 (peregrinus) とは違って、何らかの「互酬関係にある者」を指していたらしい。とはいえ敵はやはり危険だから、hostis を館 (hostage、古フランス語) に迎えて気前よくもてなし、人質 (hostage) とすることで companion (共に=cum、パン=pānis を共食する間柄) に変えることができたわけである。西洋にも古くはポトラッチ型の客人歓待制度があった例証として、バンヴェニスト (*id.*, I, p. 88) はツキディデスの証言を引いている。「トラキア王シタルケースにとって、人からそうするよう求められた時に与えないのは、人が求めた時に受け取らないこと以上に恥ずかしい振舞だった」と。このように相互性に基づく気前のよいもてなしは、顕在的にせよ潜在的にせよ、原古から現代にいたるまで人類社会の歴史貫通的な《黄金律》に他ならなかった。古代ローマでは顯職についた政治家や勝利した凱旋將軍は、その名誉と栄光を与えてくれた市民に返礼としてパンや小麦をたっぷり分配したり、円形劇場で種々のスペクタクルを提供する——詩人のユウェナリスはこの《pānis et circēnses》を一種の愚民政策だと諷刺したが——慣習的義務があったし、現代の資本制社会でも賃金が労働の対価だという幻想によってその全組織メカニズムが作動しているのだから。

2 即時／遅延収益システム

とはいえ相互性は社会構成の在り方によって様々に変化して現象する。そこで本源社会の中でも即時収益システム (immediate-return system) に依拠する狩猟採集民と遅延収益システム (delayed-return system) に依拠する農耕民におけるその現象形態の差異を明らかにしておこう。即時収益システムとは労働対象や労働手段への過去の死んだ労働への投下がほんの僅かであって、生きた労働の今ここ (hic et nunc) での活動が専ら行なわれる生産形態を指す、ウッドバーン (1988, I) が提唱した経済人類学の用語である。例えばテスタール (1985, p. 128) によると、オーストラリア先住民では、

労働の経験と習熟をつんだ人間的要素、人間が、生産諸力の、人間ではない、純粋に物的な要素を凌駕している。狩を助ける道具の作動も、人間の活動あってこそである。労働過程のなかで、生きた労働、この過程の時間の流れにそって実行される労働の方が、死んだ労働——巧みに作りあげた罠や武器の製作、たまたま捕えても選抜、飼育、調教の長い事前の労働を前提としなければ利用できない家畜のなか

に投下された過去の労働——よりも、はるかに優勢なのだ。オーストラリア狩猟民があてにしているのは、獲物や環境についての自分の知識、狩のさなかで示すその忍耐力、能力、粘り強さであって、この方が以前に作った何らかの生産手段の技術的特性よりも重要なのである。〔……〕むしろ過去の労働は、労働者から分離した物的生産手段のなかにではなく、労働者自身のなかに投下されている。

もっと一般的にいうと、この生産システムは次のような特徴をもっていた。

人間エネルギー、すなわち労働力の再生産の周期は短い。生活資料は保存がきかないので、それが生産されるたびごとに消費されてしまう。生産物の蓄積は存在しない。生活資料のエネルギーへの転化の周期は、一日ごとである。毎日、あるいはほとんど毎日、生産者は過ぎ去ったばかりの時間のうちに摂取した生活資料によってえられるエネルギーを、次の時間に必要な生活資料を生産するために使用してしまうのである。生産物のごく短い期間しか、人間エネルギーを生産するための生産手段として投資されることはない。(メイヤスー, 1977, p. 32)

平たくいえば、いわばその日暮らしの生存経済であり、従って生産=消費にあたってとり結ぶ他者との関係も散発的、偶有的、非拘束的であって、その結果バンド構造も極めて不安定で流動的だった。

この短期的な生産様式によって生まれる社会関係それ自体も、刹那的なものである。投資が僅かで、その持続が一時的であること、生産物の保存が悪いこと、互いに関係づけられてはいない営為が日々くりかえされることなど、これらのことによって永続的な組織的結合を生み出すような生産集団の形成も、あるいはまた管理者的権利の発生も促進されることはない。事実、生産細胞であるバンドは不安定で、その構成は絶えず変化する集団であることが認められている。個人が種々のバンドの間を頻繁に渡り歩き移動するということは、今日広く知られている事実である。

(*loc. cit.*)

バーナードとウッドバーンも口を揃えていっている。

一般に〔そこでは〕他の人々の能力——たとえば狩猟労働、家庭労働、性能力、再生産能力——への権利を人々はほとんど保持していない。個々の男たちは、狩にゆこうとすれば、そのとき彼らは自身で決定するのであって、家長、あるいはキ

キャンプのリーダー、その他誰かからの指令をうけてそうするのではない。これらの社会では、両親は子供の労働や他の血族の労働を統制する権限もなければ力もない。親族は一般に、他の人々を統制するための、あるいは他の人々のなかで権利を配分するための媒体手段ではないのである。(1988, II, p. 18)

自由で平等でほとんどアナキーといってもよい、こうしたバンド集団の内外を連節する強固な親族・姻族組織が流動的だと、それに代っていわば接着剤としての相互性に基づく贈与交換がその機能を最もよく発揮する。いくつかの実例をあげておこう。例えば南米のグアヤキ族（アチェ）についてクラストル（1987, p. 138）はいつている。

アチェの狩人には、自分が捕えた獲物を消費することを厳しく禁ずる食物禁忌が課せられている。バイ・ジボンブレ・ジャ・ウエメレ *bai jyvombré ja uéméré* すなわち、「殺した獣を、自ら食べてはならない」のだ。したがって、男は野営地に戻ると、獲物を家族（妻と子供達）そしてバンドの他の成員に分ける。当然彼は妻の調理した肉を食べることはない。ところが、既にふれた通り獲物はグアヤキの食料の中でもっとも重要な位置をしめている。したがって、男はそれぞれ、一生の間他人のために狩りを行ない、自分自身の食料を他人から受けとることになる。この禁忌は厳重に守られ、成人儀礼を受けていない少年でも、鳥を獲った時にはこれに従って行動する。この禁忌のもっとも重要な帰結のひとつはインディアン達に事実上、基本家族に分散することを不可能とすることである。

贈与交換がバンドの分散や分裂の防波堤になっていたわけだが、同様の状況はシリオノ、トゥピナンバ、ナンビクラワなどの民族誌からも報告されている。オセアニアからは長く狩猟採集段階に留まっていたオーストラリア先住民に登場して貰おう。テスタール（1995, p. 247）は1881年のドーソンの記述を引用している。「狩人が獲物をキャンプにもって帰ると、それにたいする権利をすべて放棄し、離れた場所において、他の人々が最良の部分で満足しなければならぬ。」それから約80年後の中央部のピチャンジャラ族についてのマウントフォード（1965, p. 17）の記録も変わらない。「一人のアボリジニが、自分で殺し、おそらく何マイルも運んできたカンガルーをもってキャンプにつくと、その死体を他のアボリジニの足元に投げだす。そして木陰に坐って、事の成行きに明らかに全く無関心なのであった。」

同様の事態はシベリアのユカギール、アフリカのハザ、ムブティなどにも見られたが、最後にアンダマン島民とサン（ブッシュマン）に関する古典的記録から引用しておこう。

アンダマン島——「既述のとおり、すべての食物は、私有財産であって、それを取得した男ないし女に帰属している。しかしながら、食物をもっている人は誰でも、もたない人に与えることが、期待されている……。この慣習の結果として、取得された食物はすべて、じっさいには、キャンプ全体に平等に分配されることとなるわけである……」(Radcliffe-Brown, 1948, p. 43)

ブッシュマン——「野菜、動物をとわず、食物と水とは私有財産であって、それを取得した人に帰属している。しかしながら、食物をもっている人は誰でも、もっていない人にあたえることが期待されている……。その結果、取得された食物はすべて、じっさいにはキャンプ全体で平等に分配されることとなるわけである」(Schapera, 1930, p. 148)

まるで同一人物が同一部族について書いたような類似の文章を並べたが、それだけ食物の贈与交換が普遍的だったことが判るだろう。《発見》された当時、旧石器段階に比定されたこれら遊動狩猟採集民は、アボリジニを除いて、リジッドな親族組織や出自・居住制をもたない場合が多く、すべて無頭制社会 (acephalous society) だった。集団狩猟などでリーダーが必要とされても、一時的、情況的で狩りが終ると何の権限もなく、幾つかの家族が集って20~30人程のバンドを形成していたが、離合集散が甚だしく、相互扶助と相互依存のシステムによって辛うじて集団の凝集性を確保していたことが判るだろう。そのためには自分の取得物の自家消費を禁止して他家消費を強制する厳しいタブーが制定されていたのである。

そして同じルールは婚姻交換にも適用された。適齢期の男女を再生産し続けるには最低500人の人口規模が必要——狩猟採集バンドの女性の出生力、子供の出産率と死亡率、男女の性差による出産と成長の不均衡などから計算して——だったから、平均25人位の小人数のバンドは常に他の諸バンドとの間で女性を交換しなければ、存続が危ぶまれた。ここから相互性に基づく集団間の連帯としてのインセスト・タブーが生じるが、レイ＝ストロース (1967, p. 552) がいったように「近親婚の禁止は、母、姉妹あるいは娘を娶ることを禁止する規則であるよりはむしろ、母、姉妹あるいは娘を他者に与えることを強いる規則である。それはすぐれて贈与の規則」に他ならなかった。但し彼は婚姻交換には性の非対称性があるが男が女を交換するのが普遍的だと主張したが、逆に女が男を交換する例も少数ながら存在した——南ティモールのテトウム族、ヴェトナムのジョライ族その他 (ゴドリエ, 2000, p. 51) ——ことを付言しておこう。この婚姻交換から生じる諸問題——限定交換と一般交換、女性＝女性交換と女性＝貴重財交換による相互性の変形等々——については続篇で詳論するが、いずれにせよ自家消費を禁じ、占有権の放棄を強制して贈与交換を起動させる相互性こそ、集団内外の連繫と交流を深め

社会を構築すると同時に、また人間と動物とを区別するメルクマールでもあった。もっとも動物でも育児期は当然として発情期において、例えば昆虫ではガガンボモドキ、鳥ではカワセミ、哺乳類ではイヌ科の動物に求愛給餌行動が見られることがあった。さらにサルでは日常での食物の分与やインセンスト回避の行動さえ観察されている (cf. 山内, 1998)。従って人間の贈与交換もじつはチンパンジーからの贈物だという説があるが、しかし占有者の方からの積極的分与行動とその返礼の欠如、分配機構としての親族システムの不在、自家消費の禁止と他家消費の強制ルールの非在等からすると、やはり人間と動物との間に質的差異があったといわねばならない。

ところが、自由で平等な無階級社会である筈の狩猟採集民の段階なのに、首長を戴き、貴族、平民、奴隷といった階層制をもつ例外的な社会があった。アメリカ北西岸、シベリア東南部、カリフォルニア、オリノコ・デルタなどである。アメリカ北西岸のクワキウトル、トリンギット、ヌートカ、ハイダ族などは盛大なポトラッチ——ヌートカ族の「贈物 (pa-chitle)」に由来する語とされる——を行なっていたことで有名だが、シベリア東南部の諸部族と共にそこではサケが、中央カリフォルニアではドングリが、オリノコ・デルタではモリッシュ・ヤシの澱粉がいずれも主要資源だった。これらの基本食料は強い季節性があったので、欠乏期に備えて大量の備蓄が必要とされた。トリンギット経済では年間を通じて食料獲得とほとんど同じ時間が保存加工作業に費され、豊饒期の資源利用の限界は捕獲能力よりも備蓄能力によって規定 (テストール, 1995, p. 72) されていたほどである。

年間に平均2000キロも遊動する狩猟採集民にとって「富は重荷」であり、可動性と負荷性とは背馳する——そこに彼らの物財に対するノンシャランな性格と物欲に対する恬淡な態度があった——から、備蓄民は必然的に定住化を余儀なくされ、村落を形成し、保存技術を開発して大量の富の蓄積を発達させることになる。当然そこから人々の心性に根本的な変化が起ったのだとして、テストール (*id.*, p. 50) は次のようにいっていた。

ブッシュマンのような遊動民では、蓄積ないし備蓄はつねに、ひとり占めないし貯めこみという反道徳的な意味をもっていた。分与のルールが支配する社会では、財は集団全体を流通し、配給されて、全員が即時に消費していたのである。備蓄はそれ自体、イデオロギー上の決定的な変化を意味している。習慣の変化としては、分与ルールの放棄ないし変形。他者にたいする態度の変化では、未来の保障にたいして、親族、姻族あるいは友情関係があてにされなくなる。時間にたいする態度の変化としては、暮らしを保証するために、現在よりも過去、つまりすでに蓄積された財のほうがはるかに重視される。労働にたいする態度の変化では、生きた労働よりも、貯蔵物に投下された死んだ労働のほうが優勢となる。自然にたいする態度の

変化としては、その大きな恵みよりも、人間労働の成果のほうがあてにされる。

遊動民では自然が天然の貯蔵庫、いわばスーパー・マーケットだったが、定住民ではつれない自然の気紛れのせいで人工的な備蓄庫が必要となり、生産と消費の遅延が発生する。だがこうなると遅延収益システムに近づくので、農耕民のところに移るとしよう。

遅延収益システムとは、予め一定量の間人エネルギーが労働対象や労働手段に投下され、開墾、整地、播種等の後、収穫ができるまで社会は一定期間待機できねばならず、従ってその間食いつなぐための生産物の蓄積が必要な生産形態をいう。塊根類だとこのサイクルが短く自然環境や品種によっては多毛作が可能だが、穀物の場合サイクルが長くなり、生産物を長期間保管したり、また収穫の一部を次年度の種子用に保存し、必要な生活資料と労働の割当てを各生産細胞に平等に分配 (distributio) するための管理システムが必須とされる。農業の自然な循環過程からこの管理組織の中心ないし頂点に位置するのは、前もって大地に労働を投下した年長者になるとしてメイヤスは次のようにいっている。

共同体的細胞の頂点に位置づけられることによって、長老は論理的に生産物の集積と倉入れの任務を託されることになる。彼は同様に生産物を管理する立場におかれる。このようにして、生産周期の再生産を保証するためのこの管理の必要から、一つの権能が生まれる。また他方では、生産細胞が構造化することによって、だれがこの権能を引き受けるべきか指示されることになる。すでにのべた前借りとその返済の循環は、年長者と年下の協力者との間で行なわれる。それは形式的には、給付＝再分配循環として発現する。これは、この類型の共同体における支配的な流通様式である。

したがって、この流通様式によって、この生産関係をその本質においてとらえることができる。この生産関係は、共同体の成員間に終身的な有機的関係をつくりだす。それは年長性（すなわち《年齢》）にもとづくヒエラルキー構造をつくりだす。それは時の経過の中で有機的に結びつく一貫した機能を果たす、経済・社会的細胞の形成を促す。それは、生産周期において最長老に帰する管理の帰属・構造・権能を規定する。(1977, p. 76~77)

つまり、農業生産サイクルが循環的な時間サイクルを起動させ、時間点で先行するものと後行するものとのあいだに債権＝債務関係が発生——即時収益システムでもこの関係はむろん存在する（たとえば親による子の扶養）が、自然（身体）^{ビュッス}的形態としてであって社会＝文化制度としてではない——し、そこから成層化された一定のヒエラルキー

構造がうみだされると同時に、生産サイクルの再生産を保証するための諸制度もまた形成されてくる。というのも、生活資料の生産が永続的に保全されるには、生命の再生産もまた社会システム全体として保証されていなければならないからである。本源経済では、牛馬やトラクターではなく人間のエネルギーが唯一の重要な生産要素だったわけだから、それ自身労働力でもあれば労働力の再生産者でもある女性の流通とそのコントロールが死活の重要性をもち、小集団がおちいりやすい人口学的な大数法則の危険をさけるためにも、集団間のネットワークを女性の配分と流通をとおして整備し、拡大してゆかねばならない。こうして物的生産関係が、インセスト禁忌をふくむさまざまな外婚規制を形成し、生命再生産関係、つまり親族制度を凝固、確立させてくるわけである。

したがって、単純な遅延収益システムをとまなう社会でも、女性は法的には未成年者としてあつかわれ、男性の親族が女性の流通と労働にたいする権利を保有し、結婚したばあい夫とその親族にこの権利が譲渡される形態をとる。「典型的に、女性の性能力、その子供、家内労働、そのたずさわる生産的な労働への権利は、男性によって保持され、女性の自由裁量権がみとめられない。」さらに、長老制といったより複雑なシステムが出現してくると、真のコミュン社会で女性や若者が享受していた、きわだった自律性が消滅してしまう。

この過程は、女性や若者が、親族や姻族のなかへしだいに組みこまれ、年長者にすぐれてイデオロギー的な統制が付与されている構造化された親族集団へしだいに編入されてゆくことをいみしている。こうした発展のおかげで年長者はますます若い女性親族へのコントロール権をもつようになり、年長者が他の男に娘を与えるとこの婚姻形態をとるようになってくる。義理の息子ないし将来の義理の息子が、その義理の父に労働を提供し、とりわけ祭式的状況での支配イデオロギーが発展する。即時収益システムで女性たちが享受していた自分の性的能力や再生産能力、自分の労働にたいする十分な現実的コントロールが、こうした状況では否定されるのである。この過程はやがて遂に——オーストラリア原住民のような一層単純な遅延収益システムのいくつかではそこまでいっていないが——女性や若者が、世帯単位のなかに完全に実質的に吸収され、家長が、女性や若者の労働成果の全部ないし相当量をコントロールするという事態をもって幕がおりるのである。

(Barnard & Woodburn, 1988, II, p. 29)

つまり遅延収益システムでは、各生産細胞が収穫した農産物を一旦村落の倉庫にプールし、必要に応じて管理者である長老の手によって再分配 (redistributio) される仕組みの長老制 (gerontocratia) が発生しやすい。耕地、種子、農耕技術や知識は先祖が

孜々として励んできた過去労働の蓄積の賜物であり、この先行世代からの恩恵的贈与に対して年少者は負い目を負い、その負債を相互性に基いて返済しなければならないからである。年長者は逆にこの債権を梃子として土地の区割りを決定したり、若年労働力をコントロールしたり、プールされた一部の備蓄を諸々の名目で私的に流用して残余を再分配する権利を保有することになる。単に物的生産においてだけではなく、婚姻交換においても長老は氏族間ないし部族間の人的ネットワークを通じて、若者から吸い上げた婚資材を用いて女性の流通を統制し、生命再生産関係をも支配するようになってくる。メイヤスーの調査 (1974, p. 210) したグロ族では、時に長老が上納された貴重財を私的に利用して複数の妻を獲得する例さえ見られた。後行者が現に生き暮らしてゆけるのも先行者が与えてくれた贈与のお蔭だから、この返済しきれない負債のために若年層は長老層に頭が上がらず、不満があっても口にしてはならず、従順にその統制に服さねばならない。分配経済から再分配経済に移行すると共に、相互性がそれ自体の運動によって水平から垂直に座標変換されてくるわけである。

この年少者による生産物や婚資材の上納は、一部が環流してこないこともあったから、まさに貢納 (tribute)、即ち一種の年貢や貢税ではないかどうかについて、嘗てフランスでホットな論争があった (cf., 山内, 1980)。しかしテレィ (1969) やパイヨン (1984) が指摘するように、年長者と年少者は階級区分ではなく、単なる年齢によるランク区分にすぎず、従って年少者もライフ・サイクルの環をつたって順送りに年長者になるのだから、剰余労働の収奪でも搾取でもなかった。それどころか、進上された共同寄託物を私的に横領し、再分配の水路を介して気前よく下方に逆流させない利己的な長老は、誰も自分の言葉に耳を傾けてくれず、人々の信頼と支持を失ない、時には「皆が平等であるべきだ」という理由から殺されることさえあった。相互性が平等な横の関係を不平等な縦の関係に変換する起動装置ではあったが、また支配／被支配の相剋性を阻止する制動装置でもあったことが判るだろう。

ついでにここで貢納 (tribūtum) 及びその関係語について一言しておこう。フランス語の名詞形で示しておく、attribution (割当て)、contribution (協力、寄与)、distribution (分配)、redistribution (再分配)、retribution (報酬) といった経済用語、並びに tribun (護民官)、tribunal (裁判所)、tribute (民会) 等々の法律用語は、すべてラテン語の「部族 (tribus)」から派生していた。この tribus は「tri (3つの) + bhu」に分解でき、ローマの始源の三部族 Ramnes、Tities、Luceres を指していた。印欧基語の bhu- の原義は定かではないが、「在る」ではないかとされ、古代イタリアのウンブリア語にも trifu 形があって、ギリシア語の部族 (phylē) の中に含まれる phu- の語源でもあった。要するにこれらの近代西欧語は、相互性に基づく財や人の移動、あるいはそれに関する協議や相談、判定などの本源社会の根源的な社会構成メカニ

ズムから淵源していたわけで、意味変化が生じたにせよ、西洋近代社会の根底にもいかに深く原古社会の観念が今尚息づいているかを示しているといえるだろう。

∴

さらに続けて、相互性を活用して自ら tribūnus (部族の長) になろうと怠け者の本源人には珍しく額に汗して働き、蓄積した財を再分配して head man になろうとするが、最終的には又しても相互性によって夢を破られるメラネシアの big man システム。平等な互酬原理に基づく無頭制のグムラオ体系と、首長、貴族、平民、奴隷のヒエラルキアをもつ不平等なグムサ体系との間を長期的に揺れ動いているビルマのカチン社会。家族制生産様式と親族原理に依拠していたがゆえに、相互性を破棄できず、遂に king になれなかった——それどころか圧制的な権利の濫用によって抑圧された庶民 (makainana) の反乱にあってしばしば弑殺された——最高首長 (abii-ai-moku) をもつハワイ社会等々。その他アフリカのシルックやレレ族の王殺しについても原稿を用意していたのだが、紙幅の関係から残念ながら今回はここで中断しておかねばならない。

Bibliographia

- Barnard & Woodburn 1988 Property, Power, and Ideology in Hunter-Gathering, in Ingold et al., II.
- バンヴェニスト 1987 『インド=ヨーロッパ諸制度語彙集』 I、II、前田耕作監訳、言叢社。
- クラストル 1987 『国家に抗する社会』、渡辺公三訳、白馬書房。
- ギロー 1982 『言語と性』、中村栄子訳、白水社。
- ゴドリエ 2000 『贈与の謎』、山内昶訳、法政大学出版局。
- Ingold et al., 1988 *Hunters and Gatherers*, I, II, Berg.
- Lévi-Strauss 1967 *Les structures élémentaires de la parenté*, Mouton.
- Meillassoux 1974 *Anthropologie économique de Côte d'Ivoire*, Mouton.
- ” 1977 『家族制共同体の理論』、川田・原田訳、筑摩書房。
- プイヨン 1984 『経済人類学の現在』、山内昶訳、法政大学出版局。
- Radcliffe-Brown 1948 *The Andaman Islanders*, Free Press.
- Ricahrd 1961 *Land, Labour and Diet in Northern Rhodesia*, Oxford U. P.
- サーリンズ 1984 『石器時代の経済学』、山内昶訳、法政大学出版局。
- Schapera 1930 *The Koisian People of South Africa*, Routledge.
- Terray 1969 *Le marxisme devant les sociétés primitives*, Maspero.
- Testart 1985 *Le communisme primitif*, I, Ed. de la Maison des Sciences de l'Homme.
- ” 1995 『新不平等起源論』、山内昶訳、法政大学出版局。
- Woodburn 1988 African Hunter-Gatherer Social Organization, in Ingold et al., I.
- 山内昶 1980 「フランス経済人類学の問題」、『甲南大学紀要 文学編』 No. 38.
- ” 1998 「ヒトとサル社会」、『大手前女子大学論集』 No. 31.